

いろいろな人々

食事をとろうと、大学会館へ向かっていると「大学って、いろんな人がいるよな」との声。自転車に二人乗りした男子学生たちが横を通り抜けて行った。「本当にそうね。」心の中で彼らに返事をする。

理事を務めたこの二年間は、個性豊かな人々との出会いであった。先生、職員そして学生達。毎週挨拶を交わす掃除の方、公用車の運転手さん、生協の方々。留学生や障がいを持った学生さんにも出会った。当たり前のことだが、誰ひとり、私と同じ人はおらず、言葉を交わした多くの人との出会いは楽しい時間だった。



毎月開いていた「女性たちとの懇談会」の最後は、佐大出身の女性たちに集ってもらった。年齢も職種も違う女性たちだったが、年相応に、苦しいことがあっても、生き生きとした生活を送っている。女子学生へのメッセージを求めると「苦しい時、寄り添ってくれる友人を作ること。チャレンジをしていくこと。チャンスがめぐってきた時、躊躇しないこと。一生懸命その仕事をやること」と、それぞれが違う言

葉で語ってくれた。

大学が発表した男女共同参画宣言には、「自らの意思で、性別に関わらず、その人の個性と能力が十分に発揮できる大学を目指すこと」と書かれている。

「女性だから」「男性だから」とひと括りで語るのではなく、一人ひとりの違いを認め合う大学。教育や子育ては、若い人の持つ、個性と能力を伸ばし、その人の希望実現に期待して行なわれるものだと思う。学内には、女性研究者や意思決定の場に女性が少ないこと。実際はそうでないのに「俺の女」的な言葉を掛けられる。女性たちの表現では「自分を、「さんま」と勘違いしている」とのこと。女子学生に対しても「お前」という言葉を使う。その不快感を複数の女性たちが語った。セクシャルハラスメント。そして教員の育児休暇をとるとき、その人に、代わる人がいないという大学ならではの課題。悪阻のときや授乳期の女性への配慮。子育てを男性も女性も仕事と両立できること。介護支援も。そして宣言文には大学の構成員である障がいを持った人、外国の人、性的マイノリティの人の持つ課題解決にも言及した。議論に多くの時間を掛けた下りであったが。

いまさら「男性・女性なんて」と言う声も聞こえるが、少子化や自殺者の増加が止まらない事を考えると、片方の性が抱える課題は、その人の課題ではなく社会的な課題だとつくづく思う。

先日参加した「大学マネジメントセミナー」でわが国の今日的課題を経済界講師が話したが、女性の子育て支援については「当然のことです」と。帰りのモノレールの中で、若い父親が席に座るとごく自然に、母親の背中におんぶされていた子どもを

抱き取り、ぐずる子どもの背中をやさしくトントンとたたいていた。本当に自然にわが子を慈しむ様子。

そして最近の朝刊に「女性だけ新しい種へ。」と宝島社の女性誌の広告文。

なかなか面白い、刺激的な文章だった。（宝島社のホームページから見ることができます。）障がいを持った学生の数が過去最高というニュースも見た。少しずつだが変わってきている。

今後、大学での、議論が活発に行なわれ、宣言の内容の隅々まで血が通って行くことを願う。



夕暮れ迫った正門の並木道。ラクウショウの木にスズメたちが帰ってきている。宮脇先生によると、「あれはスズメのお宿ではなく、スズメの学校だ」と言う。夜間学校なのか。時折、その下で、学生達の学校も開かれているとか。

大学の中のスズメの学校。騒がしく鳴く声は何を言い交わし、何を学んでいるのだろうか。息子が入学してすぐ電話を掛けてきた。「大学の生物で、夕方学内のイチョウの木に帰ってきて、鳴き交わしているインコ達は、何を話しているのかと宿題が出

た。」高校時代にはない宿題の内容に戸惑っていた14年前の息子のことを思い出した。

いろんな話を聞かせてくださった人々。そして仕事を支えてくださった職員の方々に感謝しつつ、二年間の仕事を終えます。そして最後は少し怠けてしまった「佐大スケッチ」も今回にて終わりです。